

G.M.Hopkinsの作品に於ける水のイメージ —— 水と女性なるものの変容について ——

野 口 忠 男

はじめに

1. “A Vision of the Mermaids”
—— エロスとタナトスとしての水
 2. “The Wreck of the Deutschland”
—— 破壊と創造としての水
 3. “St. Winefred’s Well”
—— 癒やしとしての水
 4. “Epithalamion”
—— 祝宴としての水
- おわりに

はじめに

G.M.ホプキンスの詩に見られる水のイメージを考察するに際して、私たちは自由自在に変容する多面的な水の意味を捕えておくことが必要である。中村雄二郎氏は、無意識の世界の中で生と死の深淵に関わる水について次の様に述べている。

川や海の水の流れ、その暗いかたまりは、私たちの無意識に大きく照応し、生と死、エロスとタナトスの両義的なイメージとして強く訴えかけてくるから、川や海の水は、次元の異なったものを結びつけ、また、いろいろな意味での世界と反世界とを境界づける媒体になりうる。⁽¹⁾

この水は異次元のものを結びつける媒体であるだけでなく、「汚れや

穢れを溶かしこみ、浄化しつつ、たえずみずからを浄化し、再生して行く水、そしてものの生命を甦らせる水⁽²⁾として理解することが出来る。さらにG.バシュラールは、移ろいやすいエレメントである水を、根源的な力を持つものとして捕えている。彼は水の瞬間に触れて次の様に語る。

われわれは今もなお水のイメージを生きているのだ。しばしば不合理なまでの執着を与えてしまう第一義的な複合性の中に包みこまれてわれわれは生きているのである。……私の夢に触れる点からすると、水の中に見出されるのは無限（＝太洋）ではなく深さなのである。……無名の水も私の秘密をすべて知っているのだ。⁽³⁾

バシュラールは、水に知による客観的な認識ではなく、イメージによる認識を認め、さらに複合的な水はわれわれを包み込み、人間の根源的な生の秘密をすべて知っているエレメントなのである。私たちはバシュラールの説く水のイメージによる認識に、創造の母胎としての水の働きを認めることが出来るように思える。

この創造の母胎としての水のイメージに、ロマン派やヴィクトリア朝の多くの詩人たちは、強い関心を懐いていたと言える。彼ら詩人たちは、水を媒体にして現実の世界から非現実の世界へ参入し、そこで真実や美を捕え、死からの再生を実現しようと試みた。E.B.ブラウニングの言葉を借りれば、彼らを取りまく現実の世界から自然神Pan⁽⁴⁾の姿は消滅してしまったのである。

ホプキンズの詩を読んでみると、そこには水に関する表現が多く用いられていることに気付く⁽⁵⁾。A.ケニイは、“……water imagery, and especially the imagery of rivers and the sea, is omnipresent;……”⁽⁶⁾と同様の指摘を行っている。ホプキンズは初期の作品から川・海・泉を描写し、水と関連させて女性なるものの存在を述べている。水と女性なるものは、彼の詩の中できわめて密接に結びつき、詩創造に於いて重要なイメージを形成している。私たちは、変容する多面的な水のイメージと女性なるものを順次たどることにより、ヴィクトリア朝の詩人としてホプキンズ⁽⁷⁾が、追及した詩精神の跡を理解することが出来ると思われる。

1. "A Vision of the Mermaids"

——エロスとタナトスとしての水

ホプキンズが水のイメージを用いて書いた初期の重要な作品は、『人魚の幻』"A Vision of the Mermaids"⁽⁸⁾である。この作品は彼がハイゲイト・スクールの生徒であった1862年のクリスマスに書かれたものである。初めにこの作品の構成を簡単に捕えておきたい。

語り手である「私」は、ある夏の夕方干潮時に船を漕いである岩"a rock"の所まで行く。後方には青い岸が横たわり、「私」は静かな時空に取り囲まれている。そこで「私」が、岩場から沈む夕日と雲と海の織り成す色彩やかな光景を眺めていると、海面に人魚の幻が見えてくる。ホプキンズは、人魚の姿や動きを巧妙な比喻や微妙な色彩を使用しながら克明に描き出していく。彼は人魚をあくまで冷静に客観的に凝視しながら、次の順序で描写していく。群れを成して海中から出現する人魚、人魚の背びれ、腰から尾の姿、肩、髪、髪飾り、岩場近くに群がる人魚、楽しそうに快活に泳ぎもぐる人魚、甘美な悲しい様子と神秘的な甘く悲しい歌声。詩の結末に於いて、海は太陽を飲み込み、人魚も満ち潮の中へ消えうせ、「私」は風に誘われ岩場を後にして、波静かな岸辺にたどり着く。「私」が入江から目を凝らしていくら眺めても、人魚の姿はすでに消え失せていた。

次にこの詩に描かれた海について考えてみたい。ここには夕方潮の満干を行う穏やかな優しい海と深く暗い海が描かれている。つまり穏和な海は、「真紅に光る黄金色の潮」"crimson-golden floods" (1.82) から理解されるように神話以前の原始的な崇高美を顕示する存在である。一方、深く暗い海は、人魚や幾多の魚貝類や水死した船人たちなどの不思議な存在が沢山生息している神秘の領域である。M.エリアーデは、すべての存在の源泉としての水を次の様に述べている。

水は形のさだかでないもの、潜在しているものの原理として、あらゆる宇宙顕現の原基として、あらゆる芽生えの容器として、一切の形が発生してくる原初の物資を象徴している⁽⁹⁾。

この深く暗い存在の源としての未知の海は、C.G.ユングによれば、
「水は無意識を表わす一番よく使われるシンボルである。……水とは
……無意識になってしまった精神（ガイスト・霊）のことである⁽¹⁰⁾」。海
は意識の深層に存在する無意識の暗い世界を暗示し、生と死、エロスと
タナトスの両義的な原理が働いていると言える。

次に深海から現われて来た人魚の変容する姿について考えてみたい。
ホプキンズは人魚を鳥の姿を用いて描いている。

Then saw I sudden from the waters break
Far off a Nereid company, and shake
From wings swan-fledged a wheel of watery light
Flickering with sunny spokes, and left and right
Plunge orb'd in rainbow arcs, and trample and tread
The satin-purpled smooth to foam, and spread
Slim-pointed sea-gull plumes, and droop behind
One scarlet feather trailing to the wind;
Then, like a flock of sea-fowl mounting higher,
Thro' crimson-golden floods pass swallow'd into fire. (11.74-83)

この引用から理解されるように、ホプキンズは人魚の群れを「白鳥の
羽毛のついた翼」“wings swan-fledged” (1.76) と捕え、さらに「ほ
っそりと尖った鷗の翼」“Slim-pointed sea-gull plumes” (1.80) へと
続き、高く飛翔する「海鳥の群」“a flock of sea-fowl” (1.82) へとイ
メージを変容し拡大させている。彼は人魚を〈鳥女〉シレーネの一面を
もつ鳥の姿で描き、伝統的な人魚の解釈を踏まえていることがわかる⁽¹¹⁾。
さらに「重々しい海の暗い深みを、緑を畳み重ねた幾マイルもの深層を
知り」“the dusk depths of the ponderous sea, / The miles profound
of solid green” (11.122-3) からわかるように、人魚は海底にも住家が
あり、〈魚女〉としての伝統も受け継いでいる。しかもここに描かれて
いる人魚は、人間を魅惑的な美と官能の世界へ誘う魔性の存在ではなく、
ばら色に光り輝く空と海的美しさに対し人間と同じ共感を示し、さらに
水死した船乗りを悲しむ優しい愛の心を有している。人魚は、美しい自

然への美的な認識と人間の悲哀への宗教的な認識を兼ね備えているのである。

生命の根源である水の中から顕現する人魚は、ユングの深層心理学によれば「男性の内なる女性的人格要因」と呼ばれるアニマを示すものである。ユングは、「水の精は、われわれがアニマと名づける怪しい女性的な存在の、より本能的な前段階である⁽¹²⁾」と述べている。私たちは原始の深海に生息する女性的な存在の果たす重要な意義——想像的な靈的な詩精神をはぐくむ母胎⁽¹³⁾——を知る必要がある。さらに私たちは、アニマを心の奥の闇の世界に封じ込めるのではなく、自然的本能的なアニマからより高い靈的なアニマへと発展変容させることが自己を確立していく上で重要な課題なのである。

ホプキンスは、生の衝動としての水のエロス性と深くかかわる人魚アニマを通して、自己の内面の不可解さに気づき、未知なる精神世界をさらに探求することになる。

2. "The Wreck of the Deutschland"

——破壊と創造としての水

次のこの小論の主題として重要な詩は、『ドイッチュランド号の難破』"The Wreck of the Deutschland"である。ホプキンスがこの作品を書くに到った経緯は次のごとくである。彼は聖職者の道を選び、自然や社会に対する深い洞察とともに、靈的な経験を積んでいった。1875年12月7日に、テムズ河口で起こったドイツ船ドイッチュランド号の難破に強い関心を懐いていた。特に彼が感動したのは、難破で溺死したフランシスコ会の修道女の英雄的な愛の言動である。ホプキンスは、イエズス会の修練期の間、2、3の献呈詩を除いて詩作をまったく断念していた。しかし彼は、聖ペイノズ学院の院長のすすめにより、『ドイッチュランド号の難破』を書く決心をしたのである⁽¹⁴⁾。

ホプキンスは、この詩を第一部の序詩と第二部の難破に関する描写で構成している。第一部に於いて、難破を自分に課せられた神の愛の試練と受け止め、恐怖と苦悩の体験を通して、深遠な神の愛をたたえるに至っている。激しく荒れ狂う海と修道女の勇気ある行為は、第二部に於い

て詳しく語られている。私たちは、まず海に関する表現を取り上げて海のイメージを考えてみたい。

And the sea flint-flake, black-backed in the regular blow,
(stanza 13, l.101)

Through the cobbled foam-fleece. (stanza 16, l.127)

Till a lioness arose breasting the babble, (stanza 17, l.135)

And the inboard seas run swirling and hawling;
The rash smart slogging brine
Blinds her; (stanza 19, ll.147-9)

Are sisterly sealed in wild waters, (stanza 23, l.183)

Burden, in wind's burly and beat of endragonèd seas.
(stanza 27, l.216)

これらの引用から理解されるように、海は渦巻き、怒濤を上げ荒れ狂う巨大な生き物として捕らえられている。それは「竜神のような海」“endragonèd seas” (l.216) に象徴的に表現されている。この巨大な竜神は、ドイッチュランド号を難破させ、多くの生命を海の中へ飲み込んでいくウロボロスの怪物である。また竜は、混沌や異教の破壊的な力を示し、悪魔の象徴でもあると言う。深い絶望と恐怖に満ちた夜の闇“frightful a nightfall” (l.117) の中で、荒れ狂う海は、勇気ある修道女の生命を奪い取っていく。ホプキンズにとってこの海は、二重の神の本性の一面である破壊的な水の力を暗示している。彼は修道女の行為を通して神の神慮を感得し、水への洞察を深めていくのである。

ホプキンズは、狂乱怒濤の竜神のような海に立ち向かう修道女の一人を、17連で女獅子“a lioness” (l.135)⁽¹⁶⁾ のような予言者“A prophet-ess” (l.136) と述べている。私たちは、竜神のような海と女獅子のよ

うな予言者に注目する必要がある。ホブキンズは、竜神のような海と戦い勝利に導こうとする強靱な修道女の宗教心をたたえるだけでなく、勇敢な修道女を荒海から救い出したい願いがあつたと考えられる。エーリッヒ・ノイマンは、『意識の起源史』で、竜の猛威から囚われた女性を救い出すことに関して次の様に述べている。

ウロボロスのな竜の猛威からアニマ・囚われの女性・を救い出すことによって、英雄の人格構造中に女性的な部分が持ち込まれる。彼は女性という形であれ「こころ」という形であれ本質的には同じものである女性的なものを持つようになり、自我が女性的なものと関係をもつか、もつための能力を手に入れることこそ征服の中心的内容をなす。まさにこの点にこそ王女と太母との相違があるのであって、[英雄]は太母とは人間的に対等な関係を持つことができないのである⁽¹⁷⁾。

それではホブキンズは、死に直面した危機のさ中で、竜神と戦う女獅子修道女の行為と意識の変容をいかに捕らえているのであろうか。

(1) 修道女は、難破の苦しみを十字架上のキリストと同じ苦難と考える、“Is it love in her of the being as her lover had been?” (stanza 24, 1.195)。次に彼女は船上での厳しさを感じるために(2) 殉教の冠を求めようとした、“……she cried for the crown then” (stanza 25, 1.199)。さらに進んで、彼女は深い悲しみのさ中に於いて、祈りをささげている時、(3) 穏やかな安らぎを得ることが出来た、“The appealing of the Passion is tenderer in prayer apart” (stanza 24, 1.214)。最後に彼女は、キリストの与える試練の真の深い意味を悟る。修道女の英雄的行為は、難破の昨日12月8日が聖母マリアの無原罪のお宿りの祝日であったため、神慮へと結びつけられていく。修道女は、難破に於ける死を通して、第二のマリアとして新しく生まれ変わっていくことになる。つまり、修道女が竜神のごとき海との戦いによって聖母マリアの無垢とあわれみのイメージに変容させられ、より高く清い存在として現れて来ることになる。さらに聖化された修道女の昇天により、英国民の不信の心を明るく照らすことを願っている。この様に考える時、修道女の英雄的行為による死は、宗教的に深い意味を持ち、神により定められた「難破の収

穫」“the shipwreck then a harvest” (stanza 31, 1.248) まで深化され、修道女の救済が実現したことになる。これは破壊を通しての靈的創造であり、死からの再生である。

私たちは、人魚の中に美的なものと同教的なものを見たように、修道女の昇華より生まれた聖母マリアのイメージに同様の要素を見い出すことが出来ないであろうか。この問いに答えるために、聖母マリアに関する幾篇かの詩の中から、『マリア様に』“Ad Mariam”を見てみたい。

Maid yet mother as May hath been ——
To thee we tender the beauties all
Of the month by men called virginal
And, where thou dwellest in deep-groved Aidenn,
Salute thee, mother, the maid-month's Queen! (11.20-4)

聖母マリアは、美しい五月のように清く、月のように無垢な「美しい娘」“the one fair daughter” (1.25) であり、美しい存在として捕らえられている。一方この詩の終わりでは、聖母マリアは次のように表現されている。

... to thee
Who to us are dew unto grass and tree,
For the fallen rise and the stricken spring to thee,
Thee, May-hope of our darkened ways! (11.37-40)

聖母マリアは、私たちの住む暗い世界を照らしてくれるし、苦しみ悩む人々に生きる力を与え救ってくれる深い慈悲の心を持っている。彼女は、尽きることのない無償の愛に生きる神聖な存在なのである。

次に『聖母マリアに捧げる五月の讃歌』“The May Magnificat”では、「万物の成長の源である」“Growth in everything” (1.16) 聖母マリアを次の様に表現している。

All things rising, all things sizing

Mary sees, sympathising
With that world of good,
Nature's motherhood. (11. 25-8)

ここにも聖母マリアの二つの面が表現されていることがわかる。彼女は、美しくすばらしい自然とすべてのものをよみがえらせる恵み深い愛を有し、万物の生長の根源として君臨している。

最後の例として、『聖なる童貞マリアをわれわれの呼吸する大気にたとえて』“The Blessed Virgin compared to the Air we Breathe” を取り上げてみたい。

She holds high motherhood
Towards all our ghostly good
And plays in grace her part
About man's beating heart,
Laying, like air's fine flood,
The deathdance in his blood; (11. 47-52)

聖母マリアは、「世界を母のようにはぐくむ天然の大気」“Wild air, world-mothering air” (1.1) と表現され、大気の神聖な美しい流れと共に、人間の血にひそむ死の舞踏を鎮める愛が明示されている。

以上の引用からも理解されるように、聖母マリアの有する二重性は、“A Vision of the Mermaids” に於いて人魚が持っていた美的な認識と宗教的な認識に明らかにつながるものである。“The Wreck of the Deutschland” の詩に於いて、修道女が美と神聖な愛を有する聖母マリアへと変容させられているのは、ホプキンスの詩精神と宗教精神が、より深化し美化し純化し、原始的にして自然的なる人魚が、より高く清い聖なる女性像へと昇華されたことを意味していると解することが出来る。

3. "St. Winefred's Well"

——癒しとしての水

ホプキンズは、聖バイノの修練院在学中に聖ウイニフレッドの奇蹟物語に強い関心を示し、『聖ウイニフレッドによせて』"On St. Winefred" や断片詩を書いている。この物語のことは、『ダーウィン時代のホプキンズ』⁽¹⁸⁾の中に詳細に述べられている。ホプキンズは、ウイニフレッドの伝説を劇詩に再構成し、物語の一部は変更しているが、本筋はほとんどそのままである。

私たちは、ウイニフレッドの変容の跡を中心にたどってみたい。彼女は荒れ狂う海にも相当する極悪非道なキャラドックに殺害される。殺害される前の彼女は、かぐわしい香りを漂わせている「スイカズラの花」"this honeysuckle" (1.17) や「貴重なばらの花」"one rich rose" (1.50) のように花のイメージでもって比喩されている清く美しい女性である。彼女がキャラドックに殺害されると、「深紅の血」"the scarlet" (Act. II, 1.13) が、「滝を流れる水」"water in waterfalls" (Act. II, 1.20) に流れ出る。彼女は殺害されたにもかかわらず、枯れていた深い谷間に聖なる泉が湧き出す奇跡がおこったのである。

So long to this sweet spot, this leafy lean-over,
 This Dry Dean, now no longer dry nor dumb, but moist and
 musical
 With the uproll and the downcarol of day and night delivering
 Water, which keeps thy name, (for not in rock written,
 But in pale water, frail water, wild rash and reeling water,
 That will not wear a print, that will not stain a pen,
 Thy venerable record, 'virgin, is recorded)
 Here to this holy well shall pilgrimages be, (Act. II, (c) 11.11-8)

この泉は、「聖なる泉」"this holy well" (Act. II, (c) 1.18) であり、聖母マリアの別名は泉であることから、ホプキンズは彼女の死を通して、彼女を美と聖からなる泉へ、さらに癒しの力を付与しているのである。

この聖なる泉の水は、病気で悩む人々の心身を癒すだけでなく、泉の周辺の草花や自然をもよみがえらせる生命の泉である。ホプキンズ自身も暗暗裡のうちに聖なる泉にひたり、自己の満たされない魂を癒したい欲求を秘めていたと推測することが出来る。“The Wreck of the Deutschland”に於いて、修道女の新生を成し遂げたのと同じ様に、ウイニフレッドの聖なる泉への復活をここでも成就している。私たちはウイニフレッドが水の要素に変容させられていることに注目する必要がある。この時点に於けるホプキンズは、泉の中に直接身をひたす行為は行っていない。彼はあくまで泉の周辺で、悩める人々が癒される喜びの光景を冷静に眺めている客観的な存在である。彼の満たされない魂と聖なる水は、まだ完全に融和することなく分離していると考えられる。

4. “Epithalamion”

——祝宴としての水

ダブリン時代のホプキンズの深い絶望と神への必死の呼びかけは、六篇の恐怖のソネット“terrible sonnets”の中に描写されている。これらのソネットに於いて癒しとしての水は姿を消し、水のイメージがほとんど用いられていないことは注目に値する事実である⁽¹⁹⁾。それでは“Epithalamion”で描かれる清らかな川は、いかなる働きをしているのであろうか。

「私たち」は山間の峡谷で、清らかな川が流れている場面を思い描くように詩人にすめられる。

... where a candycoloured,
where a gluegold-brown
Marbled river, boisterously beautiful, between
Roots and rocks is danced and dandled, all in froth and water-
blowballs, down. (11. 5-7)

「私たち」はそこで一つの叫び声を聞いた。それは町から来た大勢の少年たちだった。彼らは水浴びをし陽気に騒ぎ、夏の日を最高に楽しん

でいたのであった。その近くに「見知らぬ一人の物憂げな人」“a listless stranger” (1.14) (dark sonnets中の“stranger”の響きが感じられる) がやって来て、川の方へと降りて行く。彼は少年たちが美しい肉体をして、水辺でたわむれている姿を眺め胸躍らせる。彼は近くの淵へと急いで行く。そこは誠に美しく、まるでおとぎの国のような自然によって隔絶された楽園である。

There; sweetest, freshest, shadowiest;
Fairyland; silk-beech, scrolled ash, packed sycamore, wild
wychelm, hornbeam fretty overstood By. (11. 23-5)

ここで彼は祝宴を行うのである、“Here he feasts” (1.28)。彼は服を脱ぎ、靴を脱いで清らかな水の中へ入って行く。まさに彼のこの行為は、すべての装飾をはぎ取り、裸の自己となって神聖な水に身心をまかせる浄化の儀式である。この回帰的な浄化儀式に関して、山崎正一氏は示唆に豊む考えを述べている。

我々の日常的生存の世界は、時の経過と共に、汚れ、その生命力は衰えゆき、かくて、不正と汚辱とのみがひろがりゆく。一年の年の終り、あるいは始めに、あるいは春の彼岸、秋の彼岸に、定期的に神聖な儀礼を行い、宇宙のリズムに我々は参加するのである。生の必要を充たすための生活は、それが存続し維持されるというだけで、あらゆるものから生命力を奪い、活力を消耗させてしまう。我々は四時の運行にあわせ、定期的に我々がそこから生まれてきた根源の世界に、たとえ一瞬たりとも立ちかえり、そこから新たな生命力を得て再生し復活するために、祝祭を執行するの^{カオス}でなければならない。それは、宇宙開始以前の元初に立ちかえることであり、日常的生存の不正と汚辱の生を捨て、ひとたび死して、よみがえることである。それは、平俗な日常性が崩壊して、原初の混沌 (chaos) が出現することでもあり、また、日常生活の有限な形ある一切の秩序が崩壊して、形なきもの^{ト・アベイロン}「無限定なるもの」に我々が與ることでもある。^{あずか} (20)

彼は岩で囲われた聖なる楽園で体と魂を浄化し、原初の清い水と一体となる。彼は身を切るような冷たい水を、手足のすみずみまで味い尽くす。

And the water warbles over into, filleted with glassy grassy
quicksilvery shivèrs and shoots
And with heavenfallen freshness down from moorland still brims,
Dark or daylight on and on. Here he will then, here he will the fleet
Flinty kindcold element let break across his limbs
Long. (11.38-42)

彼が浄化の儀式を取り行う川の水は、単なる自然の清い水ではなく、その源泉は神につらなる聖なる水である。このことに関して、“The Wreck of the Deutschland”の中で歌われている。

I steady as a water in a well, to a poise, to a pane,
But roped with, always, all the way down from the tall
Fells or flanks of the voel, a vein
Of the gospel proffer, a pressure, a principle, Christ's gift.
(stanza 4, 1.29-32)

彼は福音やキリストの賜である水脈につながっている聖なる水に身をひたし、水と一体となり、神聖な婚姻の儀式を行っていると言える。その婚姻の sacrament (儀式) は、美しい自然という女性なるものの懐へいだかれる心象で描写されている。ホプキンズは、『ローザ・ミステイカ』“Rosa Mystica”でこのことを明示している。

*In the gardens of God, in the daylight divine
I shall come home to thee, mother of mine.* (11. 23-4)

ホプキンズは聖母マリアの懐に帰一したい欲求を有していたと思われる。マーリオ・ヤコービが『楽園願望』で語る「楽園は、保護し養い包

みこむ母なるものに庇護されたあり方の象徴⁽²¹⁾」に、一脈通じるものである。彼は偉大なる母胎への回帰を通して、自分自身がより一層美しく清く輝く存在に生まれ変わることを心の深層で願っていると推測出来る。

おわりに

G.M.ホプキンは、多様に変貌する水に生と死、エロスとタナトス、破壊と創造の二義的な本性を認めるだけでなく、水の中に女性なる存在アニマの生きる世界とそれらの変容をも捕えている。水の変容と併にアニマも変容し、人魚から始まり修道女、ウィニフレット、聖母マリアへと純化され神聖な姿へと昇華されている。最後に到り女性なる存在は、姿を消し、純粋な自然へと回帰され、ホプキンは、川の水で象徴される自然の懐の中へ身と魂をあずけることになる。W.ワーズワスが、深い精神的苦悩を味っていた時に、ワイ川に魂の癒しを求めたことを思い起こすことが出来る⁽²²⁾。ホプキンは、自然と言う大いなる母胎へ懐かれ、魂の癒しと浄化を体験し、新たな真実の自己を見い出そうとしていたと思われる。神を求める激しい飛翔は、水のイメージではなく、ヘラクレス⁽²³⁾の火のような火のイメージが要求される。ホプキンズに於いて、水はタレースにおけるように、生命の原理であり、運動の原理であり、魂の本性であり、さらに神的なものであった。そして水は、女性なるものと密接に結びつき、創造の母胎として働いていたのである。そこには聖職者ホプキンズと詩人ホプキンズの苦悩と喜びが、浮き彫りにされていると言える。

〔注〕

- (1) 中村雄二郎「水・存在のエレメントとしての」『エピステーメー』76、朝日出版社、1976年、p. 33.
- (2) Ibid., p. 32.
- (3) ジャン＝フランソワ・リオタル、植島啓司訳「《水が空をとらえる》」、『エピステーメー』76、p. 20.
- (4) E. B. Browning, "The Dead Pan".
- (5) John Seland, "Water in Hopkins Poetry", *Hopkins Research* 『ホプキ

- ンズ研究』第11号, 1982年, pp.13-18.
- 平田トミ子「ホブキンズの「川」三題に見る詩語及びイメージ: その発展の特徴」『ホブキンズ研究』第17号, 1988年, pp.49-66.
- (6) A. Kenny, *God & Two Poets*, Sidgwick & Jackson, 1988, p. 118.
- (7) A. Mizener, *Victorian Hopkins, Gerard Manley Hopkins by the Kenyon Critics*, A New Directions Book, 1973, p. 103.
- (8) 野口忠男 拙文「人魚の幻影—イメージの語るもの」『ホブキンズ研究』第20号, 1991年, pp. 24-31.
- (9) M.エリアーデ, 久米博訳『豊饒と再生』せりか書房, pp. 58-9.
- (10) C.G.ユング, 林 道義訳『元型論』, 紀伊國屋書店, 1990年, pp. 53-4.
- (11) 松浦 暢『水の妖精の系譜』, 研究社, 1995年, p. 232.
- (12) C. G.ユング『元型論』, p. 64.
- (13) E.ユング, 笠原 嘉・吉本千鶴子訳, 『内なる異性』, 海鳴社, 1980年, p. 80.
- (14) *The Correspondence of Gerard Manley Hopkins and Richard Watson Dixon*. Ed. Claude Colleer Abbott. London, Oxford Univ. Press, 1935, p. 14.
- (15) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, 1976, p. 146.
- (16) A. Mizener, *Victorian Hopkins*, p. 103.
- (17) E.ノイマン, 林 道義訳『意識の起源史』下, 紀伊國屋書店, 1985年, p. 541.
- (18) T.ザニエロ, 島 龍子訳『ダーウィン時代のホブキンズ』, 近代文藝社, 1993年, p. 159.
- (19) N. White, *Hopkins A Literary Biography*, Clarendon Press, Oxford, 1992, p. 425.
- (20) 山崎正一『幻想と悟り』, 朝日出版社, 1977年, pp. 61-2.
- (21) M.ヤコービ, 松代洋一訳『楽園願望』, 紀伊國屋書店, 1988年, p. 225.
- (22) W. Wordsworth, *Composed A Few Miles Above Tintern Abbey On Revisiting The Banks Of The Wye During A Tour, July 13, 1798*.
- (23) G. M. Hopkins, "That Nature is a Heraclitean Fire and of the comfort of the Resurrection".

Abstract

Water Imagery in the Works of
G.M. Hopkins

—on the transformation of water and women

Tadao NOGUCHI

When we read poems written by G. M. Hopkins, we find a lot of water imagery, especially the imagery of rivers and the sea. We should say that the water imagery in these poems is connected with women, and both of these elements function together when he creates his poems and identifies his own self.

We have chosen four specific poems in order to discuss the imagery and its transformation of water and women: "A Vision of the Mermaids", "The Wreck of the Deutschland", "St. Winefred's Well" and "Epithalamion" (in chronological order). We can see that Hopkins perceives dual qualities of God in various changing water, and presents many kinds of women: mermaids, sisters, a holy girl, and the Virgin Mary. In the end the imagery of women becomes pure water in the river. He enters into the center of nature and purifies his body and soul. He seems to find a new life in the heart of maternal nature.

For Hopkins, water functions as a principle of life and motion, the true qualities of the soul and divine power, as described in Thales, a Grecian philosopher. That is to say, water, in close connection with women, functions as the matrix of poetic creation, so in his poems we can discover the naked grief and delight of Hopkins as a poet.